

ヘラルト・ダーフィット作《森林》《キリスト降誕》三連画試論

—ブルッへの君主「森番」をめぐる—

藤村 拓也 (九州大学大学院)

15世紀末から16世紀初頭、国際貿易都市ブルッへの栄華は他の都市との競合や政治的混乱等によって終焉を迎えつつあった。一方、当時のブルッへの中心的画家であったヘラルト・ダーフィットは、時代の流れと相反するかのような牧歌的な作品《森林》(アムステルダム王立美術館よりマウリッツハイス美術館に寄託)をのこしている。繁茂する木々が一面に描かれた《森林》は、かつて初期ネーデルラント絵画史上初の純粋な風景画とみなされていた。しかし、その縦長の二分割された形状から察せられるように、《森林》は本来、《キリスト降誕》三連画(メトロポリタン美術館、ジュールズ・バーチ・コレクション)の外翼パネルを構成していたのである。

1990年代以降、《森林》を純粋な風景画とみなす制度化された眼差しへの批判に立脚し、この特異な外翼パネルを、①画家の標章、②『イザヤ書』を典拠とする「キリスト降誕」の予型論的解釈、③当時の宗教実践の反映、とする諸説が提唱されている。ただし、注文主や本来の設置場所をつたえる一次資料が発見されていないため、いまだ定説といえるものはない。くわえて開閉式三連画にとって最も重要な箇所は中央パネルであるにもかかわらず、《森林》の内側に描かれた《キリスト降誕》が等閑視されてきたことも問題点としてあげられる。つまり特異な外翼パネル《森林》の意味内容は、内側の《キリスト降誕》を中心とした三連画全体の図像プログラムを視野にいれ再考したとき、初めてかたちを成すものと考えられるのである。

そこで本発表では、まずダーフィット作《森林》《キリスト降誕》三連画をあらためて精察し、内側にいくつかの興味深いモチーフが描き込まれていることを指摘する。つぎに、キリストの降誕と世俗の君主の到来が重ね合わせられていた可能性を、同時代の作例から比較検討する。さらにダーフィットの三連画を読み解くための糸口として、ブルッへの主要な祝祭のひとつであった馬上槍試合の参加者団体「白き熊」の長が「森番」と称されていたことに注目したい。「森番」はブルッへの土着の君主であるフランドル伯の別称でもあり、ブルッへという都市のアイデンティティと「森番」が密接に結びついていたことを示唆している。

以上の考察をふまえ、外翼パネル《森林》がブルッへの君主「森番」を想起させ、前述した内側の《キリスト降誕》三連画の興味深いモチーフが、キリストと「森番」ことフランドル伯を重ね見るための鍵となっていることを指摘する。そしてヘラルト・ダーフィット作《森林》《キリスト降誕》三連画に、衰退の一途をたどっていたブルッへの市民が待望していた、新たな君主到来のメッセージが含意されている可能性を問うてみたい。